# 生活科のスタートカリキュラムに関する研究

一小1プロブレムに視点を当てた大学の授業の実践 -

# 齋藤 義雄

小学校1年生が学校にうまく適応できない問題は、「小1プロブレム」と称し、問題視されている。各自治体では、幼保と小学校の接続の問題や、小学校での入学期の指導の在り方に関して、様々な取り組みが行われている。児童は、学校のカリキュラム以外に、様々な学校文化を学ぶ。それが隠れたカリキュラムであり、隠れたカリキュラムがうまく身に付けられないことが、小学校にうまく適応できない要因の一つとなっていると思われる。そこで、生活科のスタートカリキュラムとして、学校生活や学校文化をカリキュラム化し、児童に学ばせる試みが行われている。

東京家政学院大学の1年生の科目『児童学概論』において、前述のような小学校1年生、 生活科のスタートカリキュラムの事例について学び、学生がどのような考察を行ったかを 調べた。学生が指摘した課題を含めて、生活科のスタートカリキュラムの試案を提案する。

キーワード:生活科 スタートカリキュラム 小1プロブレム 隠れたカリキュラム アプローチカリキュラム

### 1. はじめに

小学校に入学して、幼稚園や保育園との違いから、不適応を起こす児童は少なくない。その問題は「小1プロブレム」と命名された。小学校への不適応は、大なり小なりほとんどの児童に起こりうることと言っても過言ではない。小学校への不適応を未然に防ぐために、幼稚園や保育園と小学校とのゆるやかな接続を図る取り組みが重要であり、多くの自治体で試みが行われている。

子どもがいつ、どこで身に付けるか個人差があるものが、本来は隠れたカリキュラムである。子どもがいつ、どこで身に付けるかわからない不確定要素だったものを、カリキュラム化することで、補うことがカリキュラム化の主なねらいである。

小学校への不適応が大きく表面に出たのが小1 プロブレムであるととらえられる。幼稚園、保育 園から小学校に入学しての不適応は、小さな不適 応まで含めれば、ほとんどの児童に見られることであり、小さな不適応も含めた広義の小1プロブレムととらえることによって、生活科のスタートカリキュラムの意義は重大になる。

この小1プロブレムの予防のための生活科のスタートカリキュラムに関して、東京家政学院大学の児童学科の『児童学概論』の講義で取り上げた。授業のリフレクション・ペーパーとして、学生の考えを調査した。その結果も参考にして、モデルとなる試案を提案した。

試案の提案により、小1プロブレムの予防の一助となり、不適応となる児童が1人でも減少すれば何よりの救いである。

# 2. 研究の目的

小1プロブレム予防のためのカリキュラム化が 進められている。どのように進められているのか を明らかにし、カリキュラム論の観点から、問題 点を考察する授業を行った。東京家政学院大学の 学生がどのような学びを行ったかを明らかにし、 スタートカリキュラムの試案を提案することを目 的とする。

### 3. 研究の方法

小1プロブレムの予防のためのスタートカリキュラムの具体的事例の資料を学生に提示する。 授業リフレクション・ペーパーとして、学生に自 分の考えを記述させる。内容を検討し、学生の考 察も参考に、試案を提案する。

# 4. 先行研究の整理

ととする。

教育課程は、カリキュラムの訳語であるから、 教育課程とカリキュラムは基本的には同じ意味の 用語としてとらえられる。カリキュラムは主に研 究的な用語として用いられ、教育課程は文部科学 省等の公式の用語として用いられてきた<sup>1)</sup>。本論 では小1プロブレムという隠れたカリキュラムの 未習得が原因だと考えられる問題を論じる。隠れ

4-1 教育課程経営(カリキュラムマネジメント)

では小1プロブレムという隠れたカリキュラムの 未習得が原因だと考えられる問題を論じる。隠れ たカリキュラムという用語は定着しており、隠れ た教育課程とは言わないことを考慮すると、隠れ たカリキュラムの用語を使用することが妥当だと 考える。ただ、教育課程とカリキュラムは、以下 に述べるようにほぼ同じ意味なので、本論では、 カリキュラムではなく教育課程の用語を用いるこ

教育課程やカリキュラムの定義として、教育課程を計画だけの「紙キュラム」とする批判もあるが、それはかなり以前の話となった。教育課程の定義が、「子どもたちが学校でもつところの学習経験の総体」と広義にとらえられるようになり、教育課程とカリキュラムの定義上の差がほとんどなくなった。柴田によると、教育課程の定義は、1951年の学習指導要領から定義され、『教育課程とは、学校の指導のもとに、実際に児童・生徒がもつところの教育的な諸経験、または諸活動の全体を意味している。』としている<sup>2)</sup>。柴田は、別の著書でもカリキュラムの語源であるラテン語では、競馬場とか競争路コースを意味し、「人生の来歴」をも含意したと説明している<sup>3)</sup>。無藤によると、マーシュ(Marsh,1997)はカリキュラムを

『学校の導きの下で生徒が完了する計画と経験の相互関連した集まり』と定義している<sup>4)</sup>。また、日本においても教育課程の定義は、文献によって異なり、田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵らによると、『子ども達の成長と発達に必要な文化的に組織した、全体的な計画とそれに基づく実践と評価を総合した営み』と教育課程経営(カリキュラムマネジメント)の概念である PDS マネジメントサイクルを盛り込んだ定義もある<sup>5)</sup>。

教育課程経営は、カリキュラムマネジメントの ことであり定義の差ほとんどない。日本カリキュ ラム学会でも、教育課程経営という用語を用いる 立場とカリキュラムマネジメントという用語を用 いる異なる立場が存在する。カリキュラムマネジ メントでは、PDCA マネジメントサイクルの4段 階が多く用いられ、教育課程経営では、PDSマ ネジメントサイクルが用いられることが多い。 PDSとは、計画 (plan)、実行 (do)、評価 (see) である。PDCA マネジメントサイクルは、PDS マネジメントサイクルの計画と実施はそのまま に、評価が、評価 (check) と改善 (action) の ように改善が強調されているのである。しかし、 PDSマネジメントサイクルを機能させるという ことは、評価したら当然、改善をして新たな計画 を立てるのであり、改善することが中に含まれて いる。改善の段階が明確に表記されていないこと から、教育現場の一部で誤解され評価しただけで 改善が行われなかった事例等が存在したことか ら、改善を表記した方が良いということになり、 現在では文部科学省等は PDCA マネジメントサ イクルを採用している。本論では、本来の PDS マネジメントサイクルを用いる。

### 4-2 隠れたカリキュラム

教育課程やカリキュラムには、顕在的カリキュ ラムと潜在的カリキュラムがある。

顕在的カリキュラムは、すなわち学校における教育課程である。潜在的カリキュラムは、現在は「隠れたカリキュラム」と言われる場合が多い。隠れたカリキュラムの定義は、『公の教育知識の選択・正当化・配分、伝達一受容過程を背後で規定する価値・規範・信念の体系を指し、①見えな

いカリキュラム②隠れたカリキュラムというとら える立場に分類できる。』とし『①見えないカリ キュラムは、教師が無意識に伝え、児童生徒が無 自覚に学習する価値内容の分類・析出に力点を置 き、②隠れたカリキュラムは、社会統制や階級的 不平等の再生産に好都合な価値内容が学校教育に 隠されていることを問題とする』とある<sup>6)</sup>。また、 文献によっては、『学校や教師が意図しないのに、 暗黙のうちに子どもたちの学習活動や人間関係に 働きかけ、時には目的意識的な顕在カリキュラム の影響を凌駕する力をもつもの。たとえば、その 学校の校風や教室の雰囲気、教師や子どもたちを 取り巻く人間関係、また学校建築や学校施設など の物理的な環境があげられる』とする場合もある<sup>7)</sup>。 現在、日本において、見えないカリキュラムの用 語と隠れたカリキュラムの用語では、見えないカ リキュラムの用語はあまり使われることはなく、 隠れたカリキュラムが多く使われている。また、 田中によれば、顕在的カリキュラムに対して、潜 在的カリキュラムがあり、潜在的カリキュラムが Hidden curriculum の訳語である 8)。現在では潜 在的カリキュラムの訳語はあまり使われなくな り、隠れたカリキュラムという訳語が多く使用さ れている。これらの状況を考慮し、本論では、隠 れたカリキュラムの用語を使用する。定義の上で は、顕在的カリキュラムではないものが潜在的カ リキュラムであり、換言すれば、カリキュラムの 定義に基づき、それに属さないということで潜在 的カリキュラムを定義している。この2つは、二 項対立的に捉えられてきており、表と裏の関係と 受け止められている。したがって、潜在的カリキュ ラムの用語に替わり隠れたカリキュラムを用いる 場合も、同様に考える。本論では、隠れたカリキュ ラムは、通常のカリキュラム(顕在的カリキュラ ム)ではなく、「学校や社会において、子どもが 身に付け影響を受ける、生活習慣や社会的習慣、 学校文化、学校の慣習、人間関係等 | を意味する ものとする。実際に、給食などの学校生活につい て一般的に使われている例もある<sup>9)</sup>。

### 4-3 小1プロブレム

学校における不適応は、幼稚園・保育園から小

学校に入学した小学校1年生の入学期や、小学校から中学校に入学した中学校1年生の入学期に起きやすい。それぞれ、小1プロブレム、中1ギャップと呼ばれている。時期的には1年間の中でも特に入学時期が中心ということで明確であるが、内容には多様性がある隠れたカリキュラムである。

小1プロブレムという名称は、新保真紀子による造語である  $^{10}$ 。小1プロブレムの意味は、「小学校第1学年の児童が学校生活に適応できないために起こす問題行動である。また、こうした不適応状態が継続し、クラス全体の授業が成立しない状況に陥っていることをさす場合もある。小学校入学直後、遊びから学びに生活の中心が変わり、幼児教育から小学校教育へ指導が一変する段差を乗り越えられないために起こる問題とされる。精神的な幼さから小学校での集団行動がとれず、その混乱を解消できないまま、教師の話を聞かない、指示に従わない、一定時間を静かに過ごすことができない状態に陥り、授業中かってに歩き回る、教室から出て行ってしまうなどの行動がみられる。」である  $^{10}$ 。

そもそも、小1プロブレムが問題視される以前から学習指導要領では、教科等の時数は、1年生は1年間が34週間で計算されている。2~6年生では、1年間が35週間である。この1週間の差は、入学期は、教科等ではなく、小学校に適応させるために使われることを想定している。

小1プロブレムは、小学校1年生が、学校における集団生活や基本的生活習慣を学ばなかった結果、問題が発生している場合が多い。幼稚園や保育園では、自由に遊んできたのに、急に集団生活の様々なルールに従わなければならなくなる。教師に言葉で説明されたくらいではすぐに身につかない。また、小学校における基本的生活習慣は、幼稚園や保育園に比べ時間を守ることが多いと思われるが、子どもが自由にやってきた幼稚園や保育園のままリセットされないことで、小1プロブレムが起こっている場合が多い。

実際には、入学したばかりの子どもの実例は、新しい環境で、緊張感が高まり、不安になって落ち着きがなくなる児童もいる <sup>12)</sup>。小1プロブレムの小学校の課題の場面は、登下校、時程・チャイ

ム、学級規模・校舎の大きさ、教科書・時間割、 トイレ・ハンカチ等の変化があげられている<sup>13)</sup>。

2007年、東京学芸大学の小1プロブレムのプロジェクトチームは、全国の市町村教育委員会にアンケート(複数回答)を実施し、全国の教育委員会から1156件の回答があった。

- ・授業中に出歩く児童がいる。(930件)
- ・学級全体での活動で各自が勝手に行動する。 (881 件)
- ・良い姿勢を保てず、机に伏せたり、いすを揺ら したりする児童が多い。(593件)
- ・教員の指示が全体に行き届かない。(520 件) などの結果を得た <sup>14)</sup>。

2011年、東京都教育委員会の調査によれば、東京都内の公立小学校の19.0%で、「授業中に勝手に歩き回る」などの小1プロブレムが発生していた<sup>15)</sup>。

これらの要因は何であろうか。東京都教育委員会によれば、少子化や核家族化、地域社会の崩壊によって、子どもたちに人との関わりが不足している点が挙げられる。人と関わる力や基本的な生活習慣が身についていないのである。幼稚園、保育園と小学校で、お互いの教育内容が十分に共有されていない点も要因である。違いに、戸惑い、適応できていない子どもは少なくない。

### 4-4 生活科スタートカリキュラム

小1プロブレムは、児童の隠れたカリキュラムを身に付けることを助けることで予防されると思われる。小学校にその役目を担う時間は、学級活動とともに重要なのが生活科である。生活科の学習指導の基本は、中野によると「学習の主体は児童であり、そして一人一人の児童に即して何を育てるかを考えることが、生活科に求められている」としている $^{16}$ 。前述の東京学芸大学では、附属竹早小学校・幼稚園が様々なカリキュラム開発が行われ、全国に発信した $^{17}$ 。

これらの先行研究を受けて幼稚園や保育園と小学校のゆるやかな接続を図る取り組みは、多くの 自治体で行われて来た。いくつかの事例を示す。

第1に、小1プロブレム対策として、大分県教育委員会は『幼児教育と小学校教育の連携ガイドブック~スタートカリキュラム事例集~』(2013

年)がある  $^{18)}$ 。小1プロブレム対策推進事業として小学校生活科におけるスタートカリキュラムの事例を示している。第  $^{2}$ に、生活科の「スタートカリキュラム」に関しては、上越教育大学の木村によると、『「スタートカリキュラム」のすべて~仙台市発信:幼小連携の新しい視点』等の研究もある  $^{19)}$ 。第  $^{3}$  に青森県総合学校教育センターの教育相談課研究員の石澤は、『小1プロブレムの予防に関するスタートカリキュラムの研究-幼・保・小の接続に関する意識調査と SST を活用した。  $^{20)}$  。第  $^{20)}$  。第  $^{4}$  に、幼稚園の段階で、小学校の体験をさせるという取り組みも行われている。品川区では、幼保小連携のために、区内共通の『ジョイント期カリキュラム』を作成した  $^{21)}$  。

これらの先行的な実践等を踏まえ、2015年1 月に、文部科学省の国立教育政策研究所の教育課 程研究センターは、『スタートカリキュラムの編 成の仕方・進め方が分かる スタートカリキュラ ムスタートブック~学びの芽生えから自発的な学 びへ~』を公開した220。これによると、幼児期を 「学びの芽生え」と捉え、児童期は「自発的な学び」 と捉えている。また、「安心」「成長」「自立」の 3つの柱を設定している。期間に関しては、4月 や5月に限定しないで、入学当初から7月くらい までの比較的長いスパンで捉えることを奨励して いる。スタートカリキュラムのマネジメントサイ クルについては、PDCA マネジメントサイクルが 採用されている。また、資料として、幼稚園や保 育所と小学校の子ども達について、生活の様子を 紹介した『スタートカリキュラムミニブック子供 の学びと育ちをつなぐために』も公開された<sup>23)</sup>。 全国の実践を踏まえ、2015年に国立教育政策研 究所は『スタートカリキュラム スタートブック』 を作成した。全国的なガイドラインが作成された ことの意義は大きい。なお、接続期カリキュラム やスタートカリキュラムなど、いくつかの呼び名 があるが、本論では国立教育政策研究所と同じス タートカリキュラムの表記を用いる。

### 4-5 横浜版接続期カリキュラム

横浜市では、市独自の『横浜版学習指導要領』

を作成している。2010年の『横浜版学習指導要領指導資料生活科編』において、「スタートカリキュラムの作成にあたって」が示された<sup>24)</sup>。

2012年に横浜市では、横浜市の接続期カリキュラムのガイドブックである『横浜版接続期カリキュラム 育ちと学びをつなぐ』(表 1)を作成し、市として全国に先駆けて先行的な研究を行った<sup>25)</sup>。それによると、「スタートカリキュラムのねらい」は①一人ひとりの子どもが安心感をもてるようにすること。②各教科等の学習に円滑に接続をし、

学習に意欲的に取り組めるようにすること。③学習や生活の基盤となる学習集団づくり。を目標に掲げている。また、「スタートカリキュラム 育てたい子ども像」として、①安心して自分を発揮できる子ども、②新しい学級や学校のルールを受け入れ、みんなが楽しく過ごせる子ども、③学習への興味・関心をもち、意欲的に学習に取り組む子ども、を子ども像に掲げている。

5

スタートカリキュラムの時期とねらいは、次のような表にまとめられている。

表1 スタートカリキュラムの時期とねらい(出典『横浜版接続期カリキュラム 育ちと学びをつなぐ』)

| <u>X1                                    </u> | ートカサイユノムの時期とねらい (山典『懐洪脈接続期カサイユノム 目らと子に | アを フな ( ] ) |
|---|--|-------------|
| 時期  | ねらい                                    | 人とのつなが      |
|   |  | り (発達)      |
| 4月第1週   | 心をほぐす                                  | 教師や友達と      |
| 最初の5日間  | 学校に対して安心感をもつ                           | の一対一のつ      |
| くらい   | 教師や友達と仲良くなる                            | ながり         |
|   | 学校という環境に慣れる                            |             |
|   | ・学校は安心できるところだという気持ちをもつ。                |             |
|   | ・教師との1対1の関係を大切にし、信頼関係を築きながら安心感をもつ。     |             |
|   | ・学校という環境に慣れ、教師や友達との遊びや生活を楽しむ。          |             |
|   | ・幼稚園や保育園での体験を生かし、「できる」という気持ちを支えにして、安   |             |
|   | 心感をもって活動や学習をする。                        |             |
| 4月第2週~  | 教師や友達と仲良くなれる                           | 小グループで      |
| 4月末頃まで  | 自分のことは自分でできる                           | のつながり       |
|   | 新しい集団のルールを考え始める                        |             |
|   | ・少しずつ友達とのかかわりを増やし、新しい集団に慣れる。           |             |
|   | ・生活のリズムをつかみ、自分のことは自分でできるようにする。         |             |
|   | ・新しいクラスでのルールに気付いたり、考えたりしながら、その中で徐々に    |             |
|   | 自分らしく行動できるようにする。                       |             |
|   | ・やってみたい、知りたい、という興味・関心を大切にし、学習への意欲と主    |             |
|   | 体的に取り組もうとする気持ちがもてるようにする。               |             |
| 5月頃~  | かかわりを広げる                               | クラスでのつ      |
| 7月頃   | 自己発揮                                   | ながり         |
|   | 新しい集団でのルールを守る                          |             |
|   | 知的興味                                   |             |
|   | 主体性                                    |             |
|   | ・友達とのかかわりを広めたりふかめたりし、その中で自分らしさを発揮しな    |             |
|   | がら意欲的に生活できるようにする。                      |             |
|   | ・小グループからクラスでの活動へと人間関係を広げていけるようにする。     |             |
|   | ・集団でのルールを守り、規律ある生活を送る心地よさが感じられるようにす    |             |
|   | る。                                     |             |
|   | ・知的興味を生かしながら、主体的に学習に取り組んでいけるようにする。     |             |

スタートカリキュラムの充実に向けてということで、以下のような留意点を示している。

- ○幼稚園・保育園での経験や学び、保護者の指導を参考にする。
- ○指導方法として、生活に即した学びの構成を

考える。

- ○合科的・関連的な指導の充実を図る。
- ○授業時数の適切な割り振りに配慮する。
- ○学習環境の工夫を考える。
- ○幼稚園や保育園の先生と一緒に作成したり、

作成したものを見てもらったりする。

### ○職員全員の理解を図る。

これらを踏まえて、週案への位置づけを図ることが提唱されている。スタートカリキュラムとして、特別な表などにまとめることまでは求めていないが、週案への記載は求めている。

### 4-6 アプローチカリキュラム

横浜版のアプローチカリキュラムのねらいは、『生涯にわたる「学びの基礎力の育成』を図る』ことである。「学びの基礎力」とは、具体的に「学びの自立」「生活上の自立」「精神的な自立」の3つを養うことであり、次のようにまとめている。『学びの基礎力を育成するための3つの自立』

- ○「学びの自立」:自分にとって興味・関心があり、 価値があると感じられる活動を、自ら進んで行 うとともに、人の話などをよく聞いて、それを 参考にして自分の考えを深め、自分の思いや考 えなどを適切な方法で表現すること。
- ○「生活上の自立」:生活上必要な習慣や技術を 身に付けて、身近な人々、社会及び自然と適切 にかかわり、自らよりよい生活を作り出してい くこと。
- ○「精神的な自立」:自分のよさや可能性に気付き、 意欲や自信をもつことによって、現在及び将来 における自分自身の在り方に希望をもち、前向 きに生活していくこと。

アプローチカリキュラムにおける活動の三つの柱

- ① 集団の一員としての自覚「協同的な遊びや体験の充実」
- ② 学びの芽「学びの芽を大切にした活動の充実 |
- ③ 就学への期待と不安「就学への期待をもつ活動の充実 |

例えば、午睡の時間を少しずつ短くしたり、時 計を見ながら時間を意識させたりして、生活リズ ムや生活習慣においても、小学校へのスムーズな 接続を図る工夫がある。

学びの連続性・一貫性について、(幼稚園・保育園) → (小学校) の順で示す。

- ① 協同的な遊びや体験の充実→学級集団で共に 学び合う態度へ、学びの深まりへ
- ② 学びの芽を大切にした活動の充実→主体的な

学びへ、学力向上へ

③ 就学への期待をもつ活動の充実→生活や学習 に意欲的に取り組む態度へ

以上のように、アプローチカリキュラムの方向 性を示している。

### 5. 学生に提示した授業資料

学生に対して授業で示した授業資料として、本 論の「4 先行研究の整理」の大部分を提示した。 しかし、本研究のために一部加筆したため、この 「5 授業資料」の項目としては示さなかった。

### 5-1 横浜市立 U 小学校の実践事例

横浜市立 U 小学校に訪問し、S 校長先生から話を聴いた。期日は、平成 28 年 6 月 8 日である。 資料としては、横浜市立 U 小学校の 1 年生の「学年だより」をいただいた<sup>26)</sup>。

横浜市立 U 小学校は、横浜市都筑区にある平成 15 年度にできた新しい小学校である。23 学級、児童数 686 人(平成 28 年 5 月 1 日現在)の学校である。周辺は閑静な住宅街であり、広大な市立公園が隣接する好環境にある。電車の駅からは約600~700m と比較的近く、駅前には繁華街があり、商業施設も充実している。

横浜市の『横浜版接続カリキュラム 育ちと学びをつなぐ』に基づき、自校の地域や児童の実態に合わせてスタートカリキュラムを作成しているという。ただ、スタートカリキュラムとして、特別に表や冊子としてまとめているわけではなく、学年だより等により保護者に連絡しているという。

実践したスタートカリキュラムの内容等に関して、データーや昨年度の週案の記録として次の学年に継承されていると思われる。また、担当者間での情報交換は、頻繁に行われていると思われる。

S校長先生に、小1プロブレムは存在するか、 と直接尋ねてみたところ、本校には存在しないと いう回答であった。以下、実践については、PDS マネジメントサイクルに対応して記述する。

# ① 計画 (P)

横浜市立 U 小学校の平成 28 年度の接続期カリキュラムは以下の表 2 の通りであった。なお、表

表 2 平成 28 年度 4月 1年生 接続期カリキュラム 横浜市立 U 小学校

# 第1週

| 日 | 4 日 | 5 日   | 6 日       | 7 日       | 8日        |
|---|-----|-------|-----------|-----------|-----------|
| 曜 | 月   | 火     | 水         | 木         | 金         |
| 1 |     | 儀式的行事 | 国語:お話読んで  | 国語:お話読んで  | 国語:お話読んで  |
|   |     | 入学式   | 音楽:集まれ、音楽 | 音楽:集まれ、音楽 | 音楽:集まれ、音楽 |
|   |     |       | 仲間        | 仲間        | 仲間        |
| 2 |     | 入学式   | 生活:       | 生活:学習の仕方  | 生活:教科書ノート |
|   |     |       | 小学校の過ごし方  | ・立ち方、座り方  | の名前を確認しよう |
|   |     |       | ・あいさつ     | ・返事       | ・班づくり     |
|   |     |       | ・朝の支度     | ・話の聞き方    |           |
|   |     |       | ・ロッカー     |           |           |
|   |     |       | ・お道具箱     |           |           |
| 3 |     | 入学式   | ・トイレ      | 書写:線なぞり   | 国語:あさ     |
|   |     |       | ・水飲み場     | ・正しい姿勢    |           |
|   |     |       | ・靴箱       | ・鉛筆の持ち方   |           |
| 4 |     |       | 学活:帰りの支度  | 学活:帰りの支度  | 学活:帰りの支度  |

# 第2週

|   | , ,        |           |           |            |           |
|---|------------|-----------|-----------|------------|-----------|
| 日 | 11 日       | 12 日      | 13 日      | 14 日       | 15 日      |
| 曜 | 月          | 火         | 水         | 木          | 金         |
| 1 | 国語:お話読んで   | 国語:お話読んで  | 国語:お話読んで  | 国語:お話読んで   | 音楽:迎える会で歌 |
|   | 音楽:集まれ、音楽  | 音楽:集まれ、音楽 | 音楽:集まれ、音楽 | 音楽:集まれ、音楽  | う歌        |
|   | 仲間         | 仲間        | 仲間        | 仲間         |           |
| 2 | 国語:お話読んで   | 国語:名札づくり  | 体育:校庭で遊ぼう | 健康安全・体育的行  | 児童会活動     |
|   | 図書室の使い方    |           | 遊具の使い方    | 事内科検診:体の様  | 1年生を迎える会  |
|   |            |           |           | 子を調べよう     |           |
| 3 | 国語:初めての名前・ | 図工:好きな物いっ | 生活:大きくなれ私 | 算数:仲間づくりと  | 生活:草笛の道で探 |
|   | 学校の先生      | ぱい        | の花        | 数          | 検         |
|   | ・自分の名前     | ・好きなものをたく |           |            | ・春探し      |
|   |            | さん書こう     |           |            |           |
| 4 | 学活:楽しい給食   |           | 国語:つながるつな | 国語:どうぞよろしく | 国語:声の大きさど |
|   | ・白衣の着方     |           | がる        | 名刺交換をしよう   | うするの      |
|   | ・配膳の仕方     |           |           |            |           |
|   | ・班づくり      |           |           |            |           |
| 5 | 生活:わくわく学校  | 書写:鉛筆をもって |           | 道徳:学校にはどんな | 算数:仲間づくりと |
|   | 探検         | 書いてみよう    |           | 人がいるかな     | 数         |

# 第3週

| 日 | 18 日      | 19 日      | 20 日      | 21 日      | 22 日      |
|---|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 曜 | 月         | 火         | 水         | 木         | 金         |
| 1 | 国語:歌に合わせて | 国語:ひらがなの練 | 国語:歌に合わせて | 国語:歌に合わせて | 国語:歌に合わせて |
|   | あいうえお     | 習         | あいうえお     | あいうえお     | あいうえお     |
| 2 | 算数:仲間づくりと | 算数:仲間づくりと | 算数:仲間づくりと | 書写:ひらがなの練 | 生活:みんなでわく |
|   | 数         | 数         | 数         | 羽白        | わく学校探検    |
| 3 | 健康安全・体育的行 | 国語:歌に合わせて | 体育:並び方    | 体育:体育館の使い | 生活:みんなでわく |
|   | 事:発育測定    | あいうえお     | 鬼ごっこ      | 方         | わく学校探検    |
| 4 | 国語:ひらがなの練 | 算数:仲間づくりと | 音楽:どんな歌があ | 算数:仲間づくりと | 国語:ひらがなの練 |
|   | 羽首        | 数         | るのかな      | 数         | 習         |
| 5 | 道徳:みんなの決ま | 書写:ひらがなの練 |           | 生活:みんなでわく | 音楽:どんな歌があ |
|   | Ŋ         | 羽首        |           | わく学校探検    | るのかな      |

は同校の「学年だより」をもとに、筆者が必要事項以外を省略して作成した。『横浜版接続期カリキュラム 育ちと学びをつなぐ』では、表の作成は求めていないので、これが横浜市の標準である。なお、小学校1年生が対象なのでひらがなが多く、読みづらいものは、筆者の判断で漢字に直した。学校行事や児童会行事の分類も筆者が行った。

スタートカリキュラムは、生活科が中心である。 U小学校の事例では、以下のような様々な細部の 工夫が見られる。

### a 授業時間の弾力的運用

幼稚園や保育園は、1つの活動の時間は短い。また、チャイムは鳴らず、連続しているいろな活動が行われていく。入学したばかりの児童は、45分授業にまだ慣れていないので、第1週~第2週の1時限の国語・音楽には工夫が見られる。45分を2つに分けることで、20分程度の授業が2つということになり、幼稚園・保育園からのギャップが少なくてすむ。

### b 生活科のスタートカリキュラム

生活科は、スタートカリキュラムの中心である。学校生活に関する生活習慣や学習習慣に関するオリエンテーションが行われている。みんなでわくわく探検など、子どもが楽しめるような工夫がみられる。

- c 他の教科におけるスタートカリキュラム 例えば、体育で、遊具の遊び方を教えたり、 体育館の使い方を教えたりしている。
- d 学級活動によるスタートカリキュラム 学級活動において、学習習慣の形成に関す るオリエンテーションが行われている。
- e 道徳で心のスタートカリキュラム 道徳では、学校にどんな人がいるか、みん なの決まり等を確認させている。

### f 教育課程経営

カリキュラムは、毎年 PDS マネジメント サイクルや PDCA マネジメントサイクルで 見直され、改善されてきたものである。

### ② 実施(D)

入学したばかりの小学1年生なので、全体に指示してもなかなか伝わらないことが多い。同じこ

とを、何度も何度も指導することになる。教師は 根気強く教える。

大部分の児童は、この教師の根気強い指導で身 に付けることができる。

### ③ 評価 (S)

スタートカリキュラムの評価を行った場合、未達成な内容が明らかになれば、5月から7月のできるだけ早い時期に教えることになる。次年度への改善のために記録を残す。

### 5-2 山口県の実践事例

平成26年度山口県教育庁義務教育課『スタートカリキュラム実践事例集』の児童教育長期研修派遣教員が作成した実践事例から引用する<sup>27)</sup>。

### ① 計画 (P)

平成26年度山口県教育庁義務教育課の『スタートカリキュラム実践事例集』からの引用なので、 平成25年以前の実践である。

学生には、横浜市立 U 小学校のように時間割で示したが、字数の関係で時間割表 (第1~4週)は省略し、特色を以下にまとめる。

特に参考になるのは、45分授業を3つのモジュールとして実施する『にこにこタイム』である。

第1週~第2週の4月9日 (火) ~19日 (金) の1限目に『にこにこタイム』として、「音楽:歌、学活:ふれあいゲーム、国語:手遊び・読み聞かせ」の3つの教科・領域を行っている。

生活科 (学校探検④は、生活・体育) としては、 学校探検を行っている。

学校探検①机・ロッカー・下足箱、傘立て、教 室での過ごし方

学校探検②校内1階・職員室・事務室・玄関・ 保健室給食室・体育館

学校探検③校内2階・図書室・パソコンルーム・ 音楽室

学校探検④運動場探検・遊具を使った運動遊び 学校探検⑤記述なし(①~④の予備と推定) 学校探検⑥運動場

生活科のモジュールの例として、第2週の4月 16日の2限・3限の2時間の授業として、『生活・ 国語・図工』を「生活:れんげ畑に行って、春を

見つける、国語:発表会をする、図工:絵にかく」として実施している。第3週の4月26日(金)の3限・4限の2時間の授業として、『生活・国語・図工』を「生活:2年生といっしょにがっこうたんけん、国語・図工:みつけたことを絵や文で書く」として実施している。

スタートカリキュラムは、生活科が中心である。 この事例では、以下のような様々な細部の工夫が 見られる。

### a 授業時間の弾力的運用

幼稚園や保育園は、1つの活動の時間は短い。また、チャイムは鳴らず、連続しているいろな活動が行われていく。入学したばかりの児童は、45分授業にまだ慣れていないので、第1週~第2週の1時限の音楽・学活・国語には工夫が見られる。45分を3つに分けることで、15分程度の授業が3つということになり、幼稚園・保育園からのギャップが少なくてすむ。

### b 生活科のスタートカリキュラム

生活科は、スタートカリキュラムの中心である。学校生活に関する生活習慣や学習習慣に関するオリエンテーションが行われている。がっこう探検など、子どもが楽しめるような工夫がみられる。

c 他の教科におけるスタートカリキュラム 例えば、音楽のうたでなかよしでは、人間 関係の構築に寄与している。

### d 学級活動によるスタートカリキュラム

学級活動において、帰りの支度の仕方・下校グループ確認や給食の準備や清掃の仕方などの学校生活の生活習慣の形成に関する指導が行われている。

e 道徳で心のスタートカリキュラム

道徳では、「あいさつ、じゅぎょうがはじまります、ともだち」などの生活習慣や人間関係について確認させている。

### f 教育課程経営

カリキュラムは、毎年PDSマネジメントサイクルやPDCAマネジメントサイクルで見直され、改善されてきたものである。山口県児童教育長期研修派遣教員の改善の考えも

大きく反映していると考えられる。

### ② 実施(D)

入学したばかりの小学1年生は集中力が続かないので、45分授業を15分の3つのモジュールとして実施したことにより、飽きることなく集中できたため、これで身に付けることができる。

### ③ 評価(S)

スタートカリキュラムの評価を行った場合、未達成な内容が明らかになれば、フィードバックして、5月から7月のできるだけ早い時期に教えることになる。次年度への改善のために記録を残す。

# 5-3 資料における齋藤が考えた成果と課題

### (1) 成果

スタートカリキュラムは、各教科、道徳、特別活動の連携を図って、1週目から2~3週目の時期に、きちんとガイダンスを行って、適応できるようにすることが重要である。横浜市立U小学校の事例では、それが自然とできていた。校長先生の話によると、小1プロブレムは存在しないというので、予防のカリキュラムは成果をあげていると思われる。

小1プロブレムのスタートカリキュラムでは、 小学校に適応させるため、学校生活に関する生活 習慣や学習習慣を身に付けさせることが主な内容 である。また、幼稚園や保育園と小学校とのゆる やかな接続を図ることがねらいであるので、実施 時期は主に入学期の4月・5月に実施することに なる。その実施内容は、教育課程のように厳密に 決まっているというよりは、融通が利くものであ る。各学校や児童の実態に応じて、臨機応変に対 応が可能であり、厳密に決めていないことが功を 奏しているとも思われる。

小1プロブレムが問題視される以前にも、適応のためのスタートカリキュラムは実施されていた。各学校によっては、カリキュラム的にはその当時と大差ない場合も少なくない。その場合でも、教師が小1プロブレムを意識することを通して、スタートカリキュラムの内容の指導は、さらに充実することになった。

### (2) 課題

小1プロブレムの解消のためのカリキュラム

が、さらに明確なカリキュラムにまで進展することが今後の課題である。特に生活科におけるスタートカリキュラムの内容を充実させることが考えられる。また、他の教科・道徳・特別活動との連携を図り、全教育活動で取り組むことが重要となる。

しかし、そもそも小学校の生活に適応できない 児童に、適応のための内容を教えることができる かということが課題に残ってくる。適応できてい る児童は、小1プロブレム解消のためのカリキュ ラムがなくても適応できるであろうし、適応でき ていない児童が小1プロブレム解消のカリキュラ ムで適応できるようになったかどうかの検証は難 しい。比較実験のようなことができないからであ る。不適応児童の総数等の変化という統計的な改 善という漠然とした成果で確かめることとなろ う。しかし、年度が違えば違う児童なので、比較 そのものに意味があるかどうかの疑問が残る。

### 6. 質問紙調査

### 6-1 実施日

平成 28 年 7 月 20 日 (水) 『児童学概論』 15 回の講義の 15 回目 60 分の講義の後の最後 の約 30 分間

### 6-2 対象者

『児童学概論』受講者89名(回答率100%)受講者は、大部分が1年生である。

### 6-3 形式

リフレクション・ペーパー (表 3) として実施 した。リフレクション・ペーパーは、A 4 サイズ であり、表面だけ印刷した。

### 表3 リフレクション・ペーパーの実際

児童学概論リフレクション・ペーパー 学籍番号 ( ) 氏名 (

- 1 スタートカリキュラムの工夫や成果を5行以上で書きなさい。
- 2 スタートカリキュラムの課題について、以下のキーワード5つ以上を使って、10行以上で書きなさい。

(教育課程 カリキュラム スタートカリキュラム アプローチカリキュラム 隠れたカリキュラム 小1プロブレム 教育課程経営 カリキュラムマネジメント PDS マネジメントサイクル 幼保小連携 )

以上である。

キーワードは、学生の制約になってしまう懸念もあるが、ここでは記述のヒントの意味であえて提示することとした。

### 6-4 調査結果

1年生の89名のうち、「スタートカリキュラムの課題」についてのいくつかの意見を抜粋する。 学生の意見の主なキーワードと思われるものを 【】内で示したが、筆者が判断したものである。 ◇Aさん【幼保小連携】

・小1プロブレムを解消するためには、スタートカリキュラムの内容をさらに明確なカリキュラムに進展させることが今後の課題となっているのである。私が大切だと思うことは、幼保小連携をすることと、アプローチカリキュラムだ。何故なら、幼保小連携は小1プロブレムを防ぐ1番重要な役

割だと思うからだ。それは、幼稚園や保育園では、チャイムが鳴らず、連続していろいろな活動が行われていくが、小学校ではチャイムが鳴り、行動が区切られてくる。急に、幼稚園保育園の子が、アプローチカリキュラムも何もせず小学校にあがったら小1プロブレム問題の1番であると考えた要因だ。アプローチカリキュラムは、小学校という学校の課程を過ごす中で、大事なカリキュラムだと思った。学校に通いながら、習得すべきカリキュラムだと思う。それを習得することで、学校にも慣れ、今後の中学校、高校へ行っても人間として成長できると考えた。

# ◇Bさん【幼保小連携】

・スタートカリキュラムの主な目的として、幼稚 園、保育園から小学校に上がる際、多く見られる 小1プロブレムの解消と、教師が授業等で教える こと以外の学校生活において、児童達が学ぶ「隠 れたカリキュラム | と言われるものを、カリキュ ラム化することをあげたが、これらの目的を達成 するためには、小学校で行うとされているスター トカリキュラムだけではなく、その前、つまり幼 稚園、保育園で行うアプローチカリキュラムも市 や区等の地域で、スタートカリキュラム同様、重 視する必要があるのではないかと思う。両方を しっかり行う事で、幼保小連携が成立し、子ども たちの中で、幼保から小学校へ上がる際のギャッ プを感じにくく出来るのではないかと考える。し かし、小学校とは目的、人数等、違いが多くみら れるため、それを達成するにも多くの課題がある。 幼保小それぞれの教育課程経営をそれぞれが理 解、尊重し、そのうえで互いが子どもに良い影響 を与えられるようにするのが良いと思う。

### ◇Cさん【アプローチカリキュラム】

・隠れたカリキュラムを教えるため、入学した初 めの一週間に行われるスタートカリキュラムを上 手に行うには、まず幼稚園、保育園にいるときに 行われるアプローチカリキュラムがしっかりなさ れていなければならない。幼稚園、保育園と小学 校では、遊びと学びという大きな違いがあること を子どもたちに少しでも理解をさせて小学校へ送 り出さないと、突然遊ぶから学びの環境に変化し たことを受け入れられず先生の話をしっかり聞か なかったり、言うことを聞かず自分勝手な行動を とってしまったりするような小1プロブレムとい う現象が起こってしまう。スタートカリキュラム を実行する際には、Pプラン (計画)、Dデウ (実 施)、S シー(評価)からなる PDS マネジメント サイクルで年間を通して実行し、隠れたカリキュ ラムを子どもたちに教えていかなければならな い。小1プロブレムを予防するためにも、アプロー チカリキュラムの基盤をしっかりとさせたうえ で、スタートカリキュラムを行わなければならな いので、幼保小連携をしっかりとしなければなら ない。

# ◇ D さん【スタートカリキュラム】

・現在、カリキュラムを明確にすることが、大き な1つの課題である。特に、生活についてのスター トカリキュラムの内容を充実させることが考えら れている。幼保小連携を大切にし、さらに他の教 科や道徳でも連携を図り、小1プロブレムに対応 していく必要がある。隠れたカリキュラムなどを 大切にし、集団としての一員である意識を持たせ たりすることも大事だ。しかし、小1プロブレム を起こさない子はカリキュラムがなくても、そも そも自ら対応できるように成長していく。小学校 生活に適応できない子に、カリキュラムによって 小1プロブレムが解消されたかどうかは検証が難 しく、比較も難しい。そのため、この課題をどの ように子どもに実験し、検証し比較していくかが、 今後のスタートカリキュラムの課題であると言え るだろう。

### ◇Eさん【幼保小連携】

・スタートカリキュラムでは、幼稚園や保育園の 生活から小学校の生活へ適応させるために行うプ ログラムのため、幼保小連携をさらに密にしてい くこと、また、すべての教科で、このスタートカ リキュラムを取り組み、カリキュラムをもっと計 画にしていくことが課題である。幼保で行ってい たアプローチカリキュラムを、小学校で行うス タートカリキュラムにスムーズに移していくか、 幼保小連携が密にならなければとても難しいこと になってしまう。この幼保から小学校への受け渡 しでギャップが少なければ少ないほど子どもたち の精神的安定にもなっていく。PDSマネジメン トサイクル、PDCA マネジメントサイクルをもっ と行うことによってカリキュラムの充実さを見つ けることができる。教科ごとに行うことによって、 いろいろなスタートカリキュラムの取り組みが発 見できると思われる。

# ◇Fさん【生活科】

・小1プロブレムの解消のためのカリキュラムが、さらに明確なカリキュラムにまで発展することが今後の課題である。特に、生活科におけるスタートカリキュラムの内容を充実させることが考えられる。生活科の教育課程経営でも、毎年 PDS マネジメントサイクルや PDCA マネジメントサイ

クルで見直され、改善されてきたが、まだ完璧ではないので課題であると言える。また、隠れたカリキュラムをカリキュラム化することは可能であり、年間を通して PDS マネジメントサイクルで回り、次年度の改善へとつながっている為、課題になっている。しかし、根本的に小学校の生活に適応できない児童に、適応のために内容を教えることができるのかということがまず、課題なのである。だが、年度が違えば違う児童なので、比較そのものに意味があるのかどうかの疑問が残る。

# ◇Gさん【スタートカリキュラム】

・スタートカリキュラムの課題としては、小1プ ロブレムの解消のためのカリキュラムがさらに明 確なカリキュラムにまで進展することが今後の課 題となる。そのためには、教育課程経営を見直す 必要があり、PDCAマネジメントサイクルや PDSマネジメントサイクルを行って、スタート カリキュラムであったら、どのような内容を実施 したら、どのように子どもに影響が見られたかな ど、毎時間見直し、改善していくことが必要であ る。また、幼稚園、保育園に通っている時点で、 アプローチカリキュラムのように、小学校にあ がった時のことを見据え、勉強を少しでも触れて おくことをしておけば、小学校に入った時、自由 に遊んでいたことから、突然、座って授業をする というギャップを感じることを軽減させることが でき、スタートカリキュラムへの手助けともなる ので、幼保小連携をしていくことが必要である。

# ◇ H さん【アプローチカリキュラム】

・これから始まる小学校生活を楽しく不安を抱かないで、生活していくためには、幼保小連携のように、少し問題をもった子どもの事を事前に教師が知識として知ることは、入学してからの子どもを見るうえで大切だと思う。

また、学校を嫌いにならないように、スタートカリキュラムやアプローチカリキュラムは、大切だと思う。そして、アプローチの仕方があっていないと思ったら、その指導について、評価をして手直しし、よりよいアプローチの仕方を見つけることが重要だと思う。また、学校、幼稚園、保育園だけでアプローチするのではなく、子どもの家庭で、時間の使い方、あいさつの仕方など、入学

準備をしていくことが重要だと思う。

### ◇Ⅰさん【教育課程経営】

・今、スタートカリキュラムは、PDCAマネジメントサイクルによって、見直され、改善され続けているが、本当に、今までの方法では小学校になじめなかった児童が、改善されたカリキュラムにより、適応できるようになったかはわからない。(比較実験ができないから)

年度で比較しても、そもそも違う児童たちであ るため、本当に小1プロブレム解消の効果がある のか、比較する意味があるのかはわからない、と いうことなので、カリキュラムを日々見直してい る。教育課程経営の人たちが、もっと効果のある スタートカリキュラムを作るのが今後の課題であ る。特に、生活におけるスタートカリキュラムを 充実させ、また、学校に子どもたちが、隠れたカ リキュラム(暗黙のルール)をきっちりと教えて もらうことで、更に人間関係や教科以外での部分 でつまずくことがなくなると考えられる。課題は、 まだまだたくさんあるが、科学的に証拠を示しに くい分野であるし、国からお金をもらいにくく、 つらい部分もたくさんあると思うが、1人でも多 くの子どもが学校になじめ、楽しく、生活できる ようになればいいと思うし、私もそういうアプ ローチカリキュラム(幼・保)がしたいと思った。 ◇ 「 さん 【 アプローチカリキュラム】

・スタートカリキュラムだけではなく、小1プロブレムを完全に防ぐということは、難しいと思うので、幼稚園、保育園にいるうちから遊びだけでなく、学ぶことの基礎を作っていくためアプローチカリキュラムが大事だと思う。幼稚園、保育園にいるうちから「学びの自立」「生活上の自立」「精神的な自立」を養うことにより、小1プロブレムを防いで行けるのではないかと思います。幼保小連携をして、PDSマネジメントサイクルを繰り返し、実行していくことで、小1プロブレム解消のためのカリキュラムが良いものになると思います。

### ◇ K さん【アプローチカリキュラム】

・スタートカリキュラムは、幼稚園から小学校に上がってきた子どもたちの小1プロブレムを解消したりやわらげたりする効果があり、いきなり

45 分間の座学をはじめるよりも、子どもたちへ の負担が少なくてすみます。しかし、今まで幼稚 園で遊びをメインに活動してきた子どもたちに とって、45分間のという区切りにしばられ、1つ のことを学ぶということは、できる子もいれば難 しい子もいます。そのために、45分授業を15分 ずつなどに分けると、教育課程で決められている 授業時数にあわせるのも大変です。そのため、私 は幼稚園、保育園のうちから、簡単な計算をした り、文字を書いたりして、また、小学校のように 時間を決めて遊んだりするアプローチカリキュラ ムが大切だと思いました。小学校に入学して、子 どもたちが少しでもスムーズに学びに集中できる ように、幼保小連携して、その子どもたちの成長 に見合ったカリキュラムを設定すべきだと思いま す。

### ◇Lさん【教育課程】

・スタートカリキュラムは、確かに小学生になっ たばかりの子どもには、大切な教育課程だと考え られる。しかし、小1プロブレムになってしまう 子どもは、今行っているカリキュラムで減らすに は限度があると考える。実際に学校での生活習慣 や学習習慣は身につくかもしれないが、その他に も授業では教えることが難しい隠れたカリキュラ ムがあることも事実だ。それらによって小1プロ ブレムになってしまう子どもがいることは多いの ではないかと考えられる。実際に比較実験を行い、 どのやり方が有効なのかを調べることをするのが 良いのだが、そのような実験を行うことは難しい。 なので、今考えられるものを試していくべきだと 考える。それには、小学校だけではなく、幼保小 連携し、子どもたちが小1プロブレムにならない よう、早いうちからの対策が必要だと考える。他 にもスタートカリキュラムの活動の幅を増やし、 特別活動や道徳との連携をもつと取っていくべき ではないか。

# ◇ M さん【幼保小連携】

・スタートカリキュラムは、小1プロブレムという遊びが中心の幼保から学びが中心の小学校のギャップに対応できない子どもが問題視されたことにより注目されはじめた。小学校1年生は年間34週、2~6年生は35週と授業数が決まってい

るので、はじめの1週間はスタートカリキュラム にあてて、学習を始めなくてもよいことになって いる。しかし、小1プロブレムが現在問題視され ている場合が考えられているということだ。その ため1つ目にスタートカリキュラムを有意義に使 えているのだろうかという課題がある。そして、 スタートカリキュラムを行う上でのもう1つの課 題は、幼保小連携だ。幼保で、漢字を覚えたり、 英語の授業を行ったり、また普段の生活の中で算 数の計算を少しずつ取り入れるなどのアプローチ カリキュラムを多く取り入れているところ、遊び が中心でほとんど取り入れられていないところな どの差が多くある。幼保でアプローチカリキュラ ムを取り入れて、それから小学校でスタートカリ キュラムを行う、こういった幼保小連携を徹底的 に行うことが隠れたカリキュラムを知り小1プロ ブレムをなくすために必要だと思う。

### 7. スタートカリキュラムの試案の提案

### 7-1 試案の作成方針

試案の提案にあたって、自立する力を育てるスイスの生活科の理念を参考にした<sup>28)</sup>。生活科の項目に、「わたしはひとりではない」「いさかい」等があり、人間関係性に有効である<sup>29)</sup>。

試案では、学校行事等はU小学校の教育課程を基本に考える。計画表が曜日の並びに左右されないように、月曜日からの5日間とし2週間の10日分とした。給食は2週目から始まると想定した。

1週目に、生活科の授業を集中させ、適応を最優先する。1週目は時数に計上されないので使い方は自由である。生活科の年間時数以外の余剰時数として計算する。1週目は45分授業を15分3コマのモジュールとして実施する。15分3コマの場合は3の倍数で授業を実施する。

2週目は45分授業を22~23分2コマのモジュールとして実施する。2コマの場合は、2の倍数で授業を実施する。一つの教科であっても2コマと考える。生活科は、スイスの生活科の「わたしはひとりではない」に学び、児童が新たな人間関係を築き、集団に早く慣れる内容とする<sup>30)</sup>。2週目は毎日生活科を実施する。時間割が毎日変わると児童が落ち着かないので、できるだけ同じ時間帯

に同じ教科を学ぶように工夫した。

3週目以降は、通常の45分授業とする。授業の展開を工夫し、中盤で小休止や活動内容の転換を図り、児童が気分転換できるように配慮する。

4月は、モジュールを使って段階的に45分授業に適応させる。5月以降は45分授業で進める。 小学校に慣れさせることも重要なので、モジュールの多用はしない。ただ、授業における配慮事項として、児童の集中力を考慮し、それに応じた授 業の進め方を行う。授業で児童が集中できる時間は、15~20分程度であることを意識し、授業展開の中で適度に節目を入れるように心掛ける。教師は、場面の転換や、課題や発問を変えることで、15分や22~23分のまとまりを意識して授業を進める。次のように試案(表4)を示す。

### 7-2 試案の実際

表4 平成〇〇年度 4月 1年生 生活科に焦点を当てたスタートカリキュラム 試案

第1週

| 日 | 4 日       | 5 日        | 6 日        | 7 日       | 8 日       |
|---|-----------|------------|------------|-----------|-----------|
| 曜 | 月         | 火          | 水          | 木         | 金         |
| 1 | 音楽:歌 学活:ふ | 音楽:歌 学活:ふ  | 音楽:歌 学活:ふ  | 音楽:歌 学活:ふ | 音楽:歌 学活:ふ |
|   | れあいゲーム    | れあいゲーム     | れあいゲーム     | れあいゲーム    | れあいゲーム    |
|   | 国語:手遊び・読み | 国語:手遊び・読み  | 国語:手遊び・読み  | 国語:手遊び・読み | 国語:手遊び・読み |
|   | 聞かせ       | 聞かせ        | 聞かせ        | 聞かせ       | 聞かせ       |
| 2 | 生活:小学校の過ご | 生活:学校探検①   | 生活:学校探検③   | 生活:学習の仕方  | 生活:教科書ノート |
|   | し方        | ・机・ロッカー・下  | ・校内2階・図書室・ | ・立ち方、座り方  | の名前を確認しよう |
|   | ・あいさつ・朝の支 | 足箱、傘立て、教室  | パソコンルーム・音  | ・返事       | 班づくり      |
|   | 度・ロッカー    | での過ごし方     | 楽室         | ・話の聞き方    |           |
| 3 | 生活:小学校の過ご | 生活:学校探検②   | 生活:学校探検④   | 生活:学校探検⑤  | 生活:線なぞり   |
|   | し方・お道具箱   | ・校内1階・職員室・ | ・運動場探検・遊具  | ・特別教室     | ・正しい姿勢    |
|   | ・トイレ      | 事務室・玄関・保健  | を使った運動遊び・  | ・プール      | ・鉛筆の持ち方   |
|   | ・水飲み場・靴箱  | 室給食室       | 体育館        | ・その他      |           |
|   |           |            |            |           |           |
| 4 | 学活:帰りの支度  | 学活:帰りの支度   | 学活:帰りの支度   | 学活:帰りの支度  | 学活:帰りの支度  |

第2週

| 日 | 11 日       | 12 日       | 13 日      | 14 日      | 15 日      |
|---|------------|------------|-----------|-----------|-----------|
| 曜 | 月          | 火          | 水         | 木         | 金         |
| 1 | 音楽:歌 学活:ふ  | 国語:お話読んで   | 国語:お話読んで  | 国語:お話読んで  | 国語:お話読んで  |
|   | れあいゲーム     | 音楽:集まれ、音楽  | 音楽:集まれ、音楽 | 音楽:集まれ、音楽 | 音楽:集まれ、音楽 |
|   | 国語:手遊び・読み  | 仲間         | 仲間        | 仲間        | 仲間        |
|   | 聞かせ        |            |           |           |           |
| 2 | 国語:お話読んで   | 図工:好きな物いっ  | 体育:校庭で遊ぼう | 健康安全・体育的行 | 児童会活動:    |
|   | 国語:図書室の使い  | ぱい 図工:好きな  | 体育:遊具の使い方 | 事         | 1年生を迎える会  |
|   | 方          | ものをたくさん書こ  |           | 内科検診:体の様子 |           |
|   |            | う          |           | を調べよう     |           |
| 3 | 国語:初めての名前・ | 図工:好きな物いっ  | 生活:大きくなれ私 | 算数:仲間づくりと | 算数:仲間づくりと |
|   | 学校の先生      | ぱい 図工:好き   | の花        | 数         | 数         |
|   | 国語:自分の名前   | なものをたくさん書  | 生活:同上     | 算数:同上     | 算数:同上     |
|   |            | こう         |           |           |           |
| 4 | 学活:楽しい給食   | 書写:鉛筆をもって  | 国語:名札づくり  | 国語:つながるつな | 国語:どうぞよろし |
|   | ・白衣の着方     | 書いてみよう     | 国語:同上     | がる        | く・名刺交換をしよ |
|   | 学活:配膳の仕方   | 書写:同上      |           | 国語:同上     | う         |
|   | ・班づくり      |            |           |           | 国語:同上     |
| 5 | 生活:わくわく学校  | 生活:がっこうだいす |           | 生活:学校だいすき | 生活:草笛の道で探 |
|   | 探検 生活:わくわ  | きなかよしいっぱい  |           | なかよしいっぱい  | 検         |
|   | く学校探検      | 生活:同上      |           | 生活:同上     | 生活:春探し    |

### 8. 成果と課題

### 8-1 成果

『児童学概論』の授業では、本論の「1 はじめに、4 先行研究の整理の一部、5 学生に提示した授業 資料」を授業の資料として使用した。先行研究の 整理は、今回加筆したので、学生にはもう少し簡 単な内容として示した。今年度は学生の理解には 有効だった。ただ、先行研究の整理に関しては、 網羅的に確認する必要があるため、今年より詳細 な内容に充実させることができ、来年度の授業の 資料として有効活用ができるものと期待してい る。

授業の中でのリフレクション・ペーパーという 性質上、学生の意見は、資料として示した担当教 員が考える成果や課題の分析の影響を大きく受け ることは仕方ない。しかし、担当教員が分析した 成果や課題は、その教育問題の基本であるから、 それを理解できていることも成果ととらえられ る。30分という短時間で、成果と課題をA4用紙 に5行や10行以上にまとめるので、スタートカ リキュラム等の基礎的な理解は欠かせない。その 意味で、基礎の理解はできていた。

筆者が分析した成果や課題以外の視点からの記述がみられた。特に、幼稚園教諭や保育士の資格の取得を目指す学生が多い児童学科では、幼稚園・保育園の保育者の側からの視点が多かったことは成果である。それは、幼稚園や保育園のアプローチカリキュラムの重要性と、幼保小連携の重要性を認識していたということである。筆者は、小学校1年生のスタートカリキュラムの重要性を意識していたが、学生の記述から、アプローチカリキュラムの重要性を再認識させられた。

試案は、スタートカリキュラムのモデルとして、教育現場で左右されがちな時数確保等の論理の影響を超えた提案とした。横浜市立 U 小学校の平成 28 年度の教育課程をもとに作成したものであり、平成 29 年度から実践することも可能なモデルとなっている。

### 8-2 課題

学生がリフレクション・ペーパーに記入する内容は、授業で学んだ内容、言い換えれば担当教員

である筆者の考えに沿った内容になってしまった 面は否めない。また、筆者がヒントのつもりで示 したキーワードの制約を受け、自由な記述ができ なったことは課題である。

学習の成果を知る意味で、キーワードを5つ以上使うように指示したことにより、学生の記述が散漫になってしまった。キーワードは1つ以上ということにしていれば、テーマに沿った記述が可能だったと思われる。

しかし、学生が各自の経験と結び付けて記述した結果、多様な意見が出ており、学生各自の学びは行われていたと推測できる。

モデルとして提案した試案は、教育現場で陥りやすい時数確保等の論理から距離を置くものとしたので、教育現場で実現されるかどうかは課題として残される。

しかし、小学校1年生の入学後の1週間は、教育課程に組み込まれておらず、年間を34週で計算することになっている。その期間ですら、国語や算数の授業を開始することがしばしばみられる。場合によっては、その教科の授業時数として計算されてしまう場合もある。試案では、最初の1週間は生活科のスタートカリキュラムに特化して実施することを提案している。もちろん、生活科の時数としては計上せず、余剰時数として扱うにとどめる。学習指導要領の理念から考えると、試案の方が理想に近く、実施できないとすれば教育現場の方に課題であると考える。

スタートカリキュラムの内容に関しては、様々な工夫が必要である。しかし、スタートカリキュラムを工夫しても、小1プロブレムの予防にはなるが、適応できない児童の個々の事例の解決になるかどうかは検証が難しい。しかし、試案のように、限られた期間ではあるが、その期間内で十分な適応指導をすることによって、1人でも多くの児童が未然に救われる可能性は高まる。スタートカリキュラムの充実は、小1プロブレムの予防としては有効だと思われる。

今回の試案は、横浜市立 U 小学校の教育課程をもとにしたものであり、全国的なモデルというわけではない。具体性がないモデルは、机上の空論になることが危惧されるため、教育現場の実践

からモデルを作成した。各学校で試案の自校化は 可能だが、今後は、全国で実践が可能な一般的な モデルの作成を試みたい。

アプローチカリキュラムが重要であるという学生の視点を生かすと、今後は幼稚園や保育園のアプローチカリキュラムのモデルを作成することが課題になると思われる。

### 参考文献

- 1) 田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵『新しい時代の教育課程第3版』有斐閣2011年 p.2
- 2) 柴田義松『カリキュラム辞典』日本カリキュラム学 会 ぎょうせい 2001年 p.1
- 3) 柴田義松『教育課程 カリキュラム入門』有斐閣 2000 年 p.5
- 4) 無藤隆「発達とカリキュラムの間」安彦忠彦『新版 カリキュラム研究入門』勁草書房 1999 年 p.214
- 5) 前掲書 1) p.12
- 6) 高旗浩志『カリキュラム辞典』日本カリキュラム学 会 ぎょうせい 2001年 p.3
- 7) 前掲書1) p.13
- 8) 田中統治「カリキュラムの社会学的研究」安彦忠彦 『新版カリキュラム研究入門』勁草書房 1999 年 p.73
- 9) 恒吉僚子『人間形成の日米比較 かくれたカリキュ ラム』中央公論 1992年 p.66
- 10) 藤井穂高「小1プロブレムに関する研究と政策の経 緯と現状」大伴潔『小1プロブレム研究推進プロジェ クト報告書』東京学芸大学 2009年 p.2
- 11) 日本大百科全書編集部『日本大百科全書 (ニッポニカ)』小学館
- 12) 栗原治子「入学したばかりの子どもの実例」橋本創 ー・細川かおり・栗原治子・渡邉貴裕・原田智恵子・ 尾高邦生『小1プロブレム・予防&改善プログラム』 ラピュータ 2011 年 p.25
- 13) 和田信行『スタートカリキュラムがよくわかる!小 1プロブレムを起こさない教育技術』小学館 2013 年
- 14) 富山県総合教育センター『平成19年度研究報告書』1997年 p.p.101 112
- 15) Benesse 教育情報サイト編集部「教室でいったい何

- が?「小1プロブレム」の現状と対策 | Benesse
- 16) 中野重人『新訂 生活科教育の理論と方法』東洋館 1992 年 p.135
- 17) 東京学芸大学附属竹早小学校・幼稚園『小1プロブレム?学校プロブレム?できることからはじめよう!』東洋館 2007年
- 18) 大分県教育委員会『幼児教育と小学校教育の連携ガイドブック~スタートカリキュラム事例集~』大分 県教育委員会 2013 年
- 19) 木村吉彦『「スタートカリキュラム」のすべて〜仙台 市発信・幼小連携の新しい視点』ぎょうせい 2010 在
- 20) 石澤祐子『小1プロブレムの予防に関するスタートカリキュラムの研究-幼・保・小の接続に関する意識調査と SST を活用した適応プログラムの開発・実践を通して』青森県総合学校教育センター研究紀要2012 年
- 21) 花野雄太「きょういく特報部 小学校に慣れよう 小1プロブレム試行錯誤」朝日新聞社 2010年11 月1日
- 22) 文部科学省、国立教育政策研究所教育課程研究センター『スタートカリキュラムの編成の仕方・進め方が分かる スタートカリキュラムスタートブック~学びの芽生えから自発的な学びへ~』2015年
- 23) 文部科学省、国立教育政策研究所教育課程研究センター『スタートカリキュラムミニブック 子供の学びと育ちをつなぐために』2015年
- 24) 横浜市教育委員会『横浜版学習指導要領指導資料生 活科編』ぎょうせい2010年 p.p.101 - 110
- 25) 横浜市こども青少年局・横浜市教育委員会『横浜版 接続期カリキュラム 育ちと学びをつなぐ』2012年
- 26) 横浜市立 U 小学校 『1 年生学年だより』 2016 年
- 27) 山口県教育庁義務教育課『スタートカリキュラム実践事例集』2014年 p.p.4 6
- 28) 鈴木由美子『自立する力を育てる教育―スイスの生活科に学ぶもの―』玉川大学出版部 1999 年 p.p.38 39
- 29) 同上書 p.p.52 53
- 30) 前掲書 25) p.p.71 76

(受付 2017.3.27 受理 2017.6.19)